The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『源氏物語大成』の三条西家本
Author(s)	加藤, 洋介
Citation	詞林. 2007, 42, p. 62-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67572
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『源氏物語大成』の三条西家本

加藤　洋介

一　『大成』夕霧巻の三条西家本

『源氏物語大成』校異篇（中央公論社、一九五三〜五六年、以下『大成』と略称）を通覧してみると、巻によって採用されている伝本数にかなりの多寡が生じていることに、誰しも気づくであろう。河内本に関してはほぼ平均しているものの、青表紙本・別本校異では、そうした傾向が著しい。原則として五十四帖の巻ごとに仕立てられる源氏物語では、伝来の過程で巻により欠損が生じてしまい、五十四帖揃での伝存が難しいという事情によるところが大きいのであろう。また現状が五十四帖の揃本であっても、五十帖で青表紙本校異に採用しながら、帚木・花散里・野分・東屋の四巻が採用されなかった肖柏本のような場合もあるし、あるいは御物本のように巻ごとに本文系統がばらばらで、青表紙本・河内本・別本のそれぞれに校異が採用されている伝本もある（ただし帚木巻のみ不採用）。

　こうしたなかで、三条西家本のみは、五十四帖すべての巻にわたって、その校異が青表紙本校異（略号「三」）として採用されているという稀有な伝本である。この本は『大成』およびその前身である『校異源氏物語』（中央公論社、一九四二年）の段階では「三条西伯爵家蔵」とされ、現在は日本大学の所蔵となっており、近時その複製本も刊行されたところである。(1)

　ところがこの三条西家本は、現状の日大本においても、さらに溯って近代の研究史において初めて紹介された時点においても、夕霧巻を欠く五十三冊本であったとされており、『大成』夕霧巻巻頭に示されるように「三条西伯爵家蔵」本によった校異採択が可能であったはずはないのである。当時所蔵されていた三条西公正氏が紹介されたのが昭和五（一九三〇）年であり、そこですでに「逍遙院本源氏物語は五十三冊一部として伝はつてゐる。勿論元は五十四帖あつたのであらうが現今では夕霧巻が散逸してゐる」と現状を報告している。(2)三条西実隆の許で書写作業が行われ、成立した当初の三条西家本に夕霧巻が存していたことは、『実隆公記』享禄四

（一五三一）年二月十三日条に「横笛鈴虫校合、夕霧一□同校之了」とあることから知られる。また宮内庁書陵部に所蔵されている三条西家本の複数にわたる転写本によれば、後陽成院本が慶長十九（一六一四）年の奥書を有しており、霊元院本は延宝六（一六七八）七年頃の書写かと推定されている（『図書寮典籍解題　文学篇』）。したがって三条西家本夕霧巻も、江戸時代初期までは存在していたことが確認できるわけである。その後の伝来の過程において夕霧巻は失われたわけであるが、三条西公正氏による紹介とほぼ時期を同じくして調査校合の作業が開始された『大成』が、三条西家本夕霧巻に直接拠ることは無理であったと想像されるのである。(3)

　この三条西家本夕霧巻の欠帖について、日大本の複製では、書陵部蔵霊元院本によって補うという措置を採っている。複製本の夕霧巻解説によれば、霊元院本は「他の巻で調べてみると行詰、漢字仮名はむろんのこと字母字形、ミセケチ、補入等にいたるまで全く原本の姿をそのまま再現している」という三条西家本の臨模本である。この霊元院本と『大成』底本とを比較し、合わせて『大成』青表紙本校異に掲げられている三条西家本の校異とを突き合わせてみると、他巻にはない夕霧巻校異にのみ顕著な傾向を指摘することができる。それは『大成』青表紙本校異の「三」（三条西家本の略号）と霊元院本とが、一〇八箇所にわたって一致しないばかりか、その一致しない例のうちの半数以上が、本来校異として掲げる必要のない、すなわち霊元院本によれば『大成』底本との間に異同のないものなのである。

　少し例を挙げてみる。『大成』頁—行『大成』底本—『大成』「三」校異—霊元院本の順で掲げ、補入は「〈補入文字〉」の如く括弧書で示した。

1309—11　もたまへるに—もたまへる〈に〉三—もたまへるに

1310—07　ひとくたり—ひと〈くた〉り三—ひとくたり

1315—03　人を—人〈を〉三—人を

1315—13　ことさらめきて—〈こと〉さらめきて三—ことさらめきて

1316—06　えおもひえす—え思〈ひ〉えす三—え思ひえす

『大成』の青表紙本校異は、河内本や別本とは採用基準が異なり、結果として異文とはならない場合であっても、補入・ミセケチ・傍記といった様態を示して校異を掲げることになっている。ここに挙げた例はいずれもその基準に従って、補入の校異として採用されたものである。しかしながら霊元院本によればこれらは補入ではなく、本文上の異同もないため、校異としては本来掲げる必要はないということになる。ミセケチに関わる校異にも同様のものがやはり見出される。

1310—07　御返—御返事三—御返

1314—05　まかてん—まかんてん三—まかてん

1315―13　宮―宮は三―宮

これらもミセケチによる本文訂正の様態を示すために掲出された校異であるが、霊元院本によればそうした訂正は施されておらず、やはり校異として掲げる必要のないものである。このような事例が非常に多く存することから、次のようなことが想定されよう。すなわち、欠帖を補うために『大成』夕霧巻の三条西家本として使用された本は、書写の質がそれほど良好ではなく、書写時ないしは後の校合時において、補入やミセケチといった手段によって本文に訂正の筆を多く入れた本であった。そしてそれが『大成』の作業において、三条西家本にもともと施されていたものと混同されてしまい、結果として本来掲出する必要のない校異が、「三」の校異として大量に採用されるに到ったのであろう。このほかにもこうした訂正の筆を経由することなく残されてしまった、書写時の衍字等も含めた誤写による異文が、『大成』の三条西家本校異には多数含まれている。

二　『大成』の使用した三条西家本

前章で述べた三条西家本夕霧巻の欠帖については、池田利夫氏がすでに疑念を提起している。[4] ミセケチや補入といった詳細な校異が、『大成』夕霧巻の三条西家本についても掲げられており、何らかの伝本によって代用されたことは疑いない。池田氏はそれについて、「三条西家本と称して代りに用いうる本としては書陵部にある宸翰の模本」、あるいはその宸翰本の転写本であり、現在天理図書館に所蔵されている桃園文庫旧蔵本と思われる本が使用された可能性を指摘している。

書陵部蔵の霊元院本がこれに当たらないことは、前章で比較してみた通りである。そこで天理図書館蔵本（九一三・三六・イ九三、本稿では以下この本を天理本と称す）をもって、『大成』夕霧巻の三条西家本校異、および霊元院本との相違箇所と突き合わせてみた。すると前章に少し挙げた例を含め、本来三条西家本校異として掲出する必要のない大量の校異が、ことごとくこの天理本に由来するものであったことが知られるのである。池田利夫氏の推定の通り、『大成』夕霧巻の三条西家本は、この天理本によって代用されたものであったと見て間違いあるまい。『大成』が三条西家本校異として挙げている次のような例も、

1310―04　なとせさせ―なとをさせ三
1374―03　せしかき―をしかき三
1312―09　事よ―ことは三
1334―11　その文よ―そのふみは三

いずれも霊元院本によれば異同はない。しかも霊元院本のこの部分、「せ」（字母世）が「を」に、「よ」（字母与）が「は」に、ともに非常に紛れやすい書体で書かれている。天理本書写者による誤写であることが、容易に想像できるのである。

さらに夕霧巻以外の巻についても、実際の『大成』の校合作業において三条西家本として使用されたのは、この天理本であったと思われる。この天理本は、奥書から見て、三条西家本の模本の一つである、書陵部蔵後陽成院本からの江戸初期転写本である。その書写態度は親本に忠実であろうとしたらしく、日大本と比較しても、字母や仮名遣に異なる所がしばしば見受けられるものの、漢字と仮名の相違や一行文字詰、一面行数など、日大本（夕霧巻は霊元院本）に等しい。句を切るための朱点や朱合点も、丁寧に写されている。

この天理本でもっとも注目されるのは、各巻に貼り込まれた大量の付箋である。たとえば松風巻一丁表四行目、日大本で、

なとあるへきさまにしをかせ給

とあるところ、天理本では「しをかせたまふ」とあり、日大本の「給」が、天理本では仮名書で「たまふ」となっている。ここに「をかせ給」と書かれた付箋が行頭に貼られている。

また同じ一丁表の九行目、日大本では、

たのめたまひし人〳〵つとひすむへき

となっている部分、天理本では「人ゝつとひ」となっている。ここにも日大本に等しい「人〳〵つとひ」と書かれた付箋が行頭に貼付されている。

ほかにも行幸巻十九丁裏五行目、

たまふむかしよりおほやけわたくしのこと

と日大本にあるところ、天理本では「お〈ほ〉やけわたくし」のように「ほ」が補入になっている。ここにもやはり「おほやけわたくし」と記した付箋が貼られている。

これらの付箋が意図したところは明らかであろう。日大本と相違している箇所について、付箋によって日大本の本文の形を逐一示しているのである。この天理本は、親本に忠実に書写しようとしているものの、やはり一部に日大本との相違が生じてしまっている。そこで漢字と仮名の相違や、一行文字詰、補入やミセケチの様態、そして本文の誤写など、およそ字母の違い以外の相違について、その一つ一つを丁寧に指摘していったものなのである。そしてこれらの大量の付箋は、『大成』を編む過程で実施された校合作業によるものと思われる。

この天理本には、『天理図書館稀書目録　和漢書之部第三』にも記すように、「昭和十二年六月十四日以三条西家証本一校畢長船清水」の付箋を持つ巻がある。ここにいう「長船清水」とは、池田利夫氏も指摘するように、[5]『大成』の「「源氏物語大成」の経過について」に協力者として名前の挙がっている長船省吾氏と清水文雄氏であろう。手許に置くことの難しい伝本を使用するに際し、それに近い書写の本を求め、さらに原本によって精密な校合作業を全巻に施した上で用いようとしたのである。この当時において、可能な限り資料の精度を高めようとした学問的誠実さを十分に窺わせるものがあ

ろう。その結果は『大成』の校異にふんだんに盛り込まれている。

0886—03　あしよはきくるまなと—あしよは〈き〉くるまなと三
0896—10　こと〳〵しき—こと〳〵し〈き〉三
0897—09　御ありさまを—御ありさまを三
0900—05　うちいてたまはす—うちいてたまたまはす三
0904—11　さはかしうとも—さはかしく〈と〉も三
0907—13　御ゆめも—御ゆめ〈も〉三
0910—14　てを〻しすりて—〻「テ」を〈を〉しすりて三

『大成』に指摘されている、こうした補入やミセケチの校異は、すべて天理本に校合された付箋によったものと思われる。これらが三条西家本原本によったものでないことは、『大成』三条西家本校異に散見される誤りが、やはり天理本に由来することからして明らかである。同じ行幸巻から挙げるならば、

0885—01　よからむ—よならん三

日大本は「よからん」とあり、『大成』底本との間に異同はない。『大成』が校異として「よならん三」を挙げたのは、天理本によったものであり、「か」(字母加)を「な」(字母那)との字形の類似から誤ったものであろう。

0885—09　いへと—いへは三

日大本には「いへと」とあり、やはり校異として挙げる必要はない。『大成』が「いへは三」としたのは、天理本に「いへは」とあったのによったためである。天理本には本文への不審を表示するためかと思われる、紺地の小紙片が貼られている。

0890—06　ひまなく—そらなく横池肖—うらなく三

日大本には「そらなく」とある。『大成』の校異は、天理本に「うらなく」とあることによるものであり、「そ」と「う」の誤写であろう。

0890—12　みたてまつり—みえたてまつり三

日大本では「みたてまつり」であるが、天理本は「みえたてまつり」となっている。日大本の連綿を「え」と見間違った故の天理本の衍字であり、やはり『大成』の校異は天理本によったものと思われる。

0893—06　たつねかえさふ—たつねかへさま三
0905—09　いみしう—いみしか三

この二例とも不自然な異文になっているが、いずれも天理本の誤写によるものであったことが確認できる。このように日大本・天理本・『大成』三条西家本校異の三者を比較検証することで、『大成』三条西家本校異の誤りの中には、日大本とは無関係な、天理本に由来するものが混在していることが明らかとなる。またこのことは、『大成』所収の三条西家本が、欠帖となっている夕霧巻のみならず、すべての巻につい

て天理本によって代用されたものであったことも教えてくれるのである。
『大成』所収の三条西家本については、他の伝本と異なる、次のような事情のもとに作業が進められていったものと推測されよう。まず三条西家本（日大本）にかなり忠実な書写本である天理本に、さらに三条西家本原本との精密な対校作業が施され、その異同は付箋に書き込まれて該当箇所へと貼付された。その上で『大成』底本との異同状況が天理本によって調査され、三条西家本校異としてまとめられた。これによりかなり精度の高い三条西家本校異がまとめられたが、一部に対校作業から漏れてしまった天理本に由来する校異が、三条西家本校異として混入してしまった。またこのほかに、『大成』底本との比較作業において、付箋の内容や本文異同を見落としたことによる校異の漏れがある。そして夕霧巻に本来挙げる必要のない校異が大量に見出されるのは、三条西家本の側に欠帖という事情があって、他の巻で行なったような原本との校合作業を、夕霧巻にのみ実行できなかったことによるものであった。他巻では随所に貼付されている三条西家本原本との対校作業による付箋が、天理本夕霧巻にのみ一切見当たらないのである。

三　『大成』夕霧巻の問題点

『大成』が三条西家本校異をどのように編集していったかについては、これでほぼ明らかになったわけであるが、夕霧巻に関してはなお問題があるように思われる。日大本の複製本が、欠帖となっている夕霧巻に採用した霊元院本の、その模本としての信頼性である。霊元院本と天理本、そして『大成』三条西家本校異の三者を比較検証することで、『大成』を補正することはほぼ可能であるが、さらに京都大学附属図書館蔵の中院文庫本五十二帖（中院・V・二〇）を参照してみた。[6] この中院文庫本も、天理本と同様に、字母は異なるものの、漢字と仮名の相違や一行文字詰、一面行数、朱点や朱合点、イ本注記など、日大本を忠実に書写しようとした本である。

本稿末尾に付した「『大成』夕霧巻の青表紙本校異「三」補正」では、A『大成』から削除すべきもの、B『大成』を修正あるいは増補すべきもの、Cなお調査を要すべきもの、の三つに大別した。Aは霊元院本・中院文庫本ともに一致して『大成』底本との間に異同を生じておらず、『大成』校異から削除すべきと判断されるものである。先に検証したように、これらは天理本の誤写等がそのまま三条西家本校異として採用されてしまったものである。Bは霊元院本・中院文庫本・天理本の三者が一致しており、『大成』底本との校合作業において校異として掲出すべきものが漏れてしまったもの、あるいは霊元院本・中院文庫本が一致して、ミセケチなどによって本文が修正されているものの、『大成』校異にその旨

の指摘がないものを挙げている。

問題なのはCに分類したものである。ほとんどが補入あるいはミセケチに関わるものであるが、それ以外のものの中で、

1335—11　たまさかに—たまさか［中院本ハたまさかに］三

1357—12　そへたるか—そへたる［中院本ハそへたるか］三

まずこの二例は、霊元院本の側に誤写の可能性が疑われるものである。「たまさか三」「そへたる三」としたのは霊元院本によったが、中院文庫本によれば異同はないことになり、前後の文脈からみても中院文庫本を採るべきかと思われる。またミセケチに関するものでも、

1342—13　なけききこゆ—なけきゝきこゆ［中院本ハなけきゝこゆ］三

この「なけきゝきこゆ」というミセケチは、霊元院本書写時の訂正の可能性もあり、原本の姿を留めたものかどうか不審が残る。その他の事例のほとんどは補入に関するもので、霊元院本によれば補入となっているものが、中院文庫本では補入とはなっていないのである。

書写に際して、親本がある文字を補入で書いてあっても、書写者によってはこれを本行に繰り入れて書写することは自然な行為である。あえてすべてを親本のままに書写しようという特殊な態度であれば、一〜二文字の補入であっても、わざと親本のままに書写することはありえよう。霊元院本も中院文庫本も、そして天理本も、基本的には一行文字詰を親本通りに書写しようとした本である。したがって例えば夕霧巻であっても、

1349—09　殿におはしても月をみつゝ—〈とのにおはしても月をみつゝ〉三

こうした多数の文字を補入してあった場合、霊元院本・中院文庫本・天理本三者ともに補入で書写している。本行に組み込んで書写してしまうと、一行に収まらなくなってしまうからである。逆に一〜二文字程度であれば、書写態度によっては本行に組み込むこともありえるし、親本の様態とは別に書写時の過失によって文字を補入する必要が生じる場合もありえよう。

夕霧巻以外の中院文庫本の状況を見てみると、どうやら日大本が補入やミセケチにしている場合であっても、その多くは本行に組み入れて書写しているようである。「イ」や「本」とした他本との校合は、日大本に等しく書き込まれているし、一部の朱筆や片仮名による補入も丁寧に写されている。しかしながらそれ以外は日大本の通りに厳密に書写しようとはしなかったらしい。例えば帚木巻では、日大本が補入とする三〇箇所のうち、中院文庫本も同様に補入で書写したところは五箇所しかない。ミセケチにするところでも、日大本の二六箇所のうち、それを踏襲して書写したところは一一箇所にす

ぎない。他はすべてミセケチによる本文訂正後の本文を選択して写している。日大本の様態のまま書写するかどうかについて、何らかの基準があったようにも見受けられず、その点では恣意的と言ってもよいであろう。さらに中院文庫本ではこのほかに、日大本の様態とはまったく無関係に、書写時の過誤から補入やミセケチによって本文を訂正していることもしばしばある。

　こうしてみるとCに分類したものの大部分は、そのまま『大成』三条西家本校異として追加すべきものと見なしてよいかと思われる。ただ日大本の調査はいまだ全帖に及んでおらず、霊元院本の書写態度との照合も不十分であるため、なおこの点については今後の課題としておきたい。

注

(1)『日本大学蔵源氏物語』(全十三巻、八木書店、一九九四～九六年)のうちの「三条西家証本」一～十一がそれにあたる。またこれとは別に、日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店、一九五八～六三年)が底本として採用した宮内庁書陵部蔵本も「三条西家本」と称されることがあり注意を要する。この書陵部本にも『青表紙本　源氏物語』(新典社、一九六八～七〇年)として複製がある。本稿では特に断らない限り、「三条西家本」は日本大学蔵本のことを言うものとして用い、日大本と称することもある。

(2)三条西公正「証本源氏物語の原本に就いて」『国語と国文学』一九三〇年五月。

(3)『源氏物語大成』研究篇の「現存重要諸本の解説」にも特にこの点に関する言及はないが、『源氏物語事典』の「諸本解題」には「五十三帖。夕霧欠」とある。

(4)池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』第一章「三条西家青表紙証本の問題点」、笠間書院、一九八八年、初出は一九八五年三月。

(5)注(4)に同じ。

(6)「http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/kichosearch/src/naka 111.html」から閲覧可能。

付　『大成』夕霧巻の青表紙本校異「三」補正

　以下は、日大本の複製である『日本大学蔵源氏物語』の夕霧巻(書陵部蔵霊元院本)をもって調査した校異を、さらに京都大学附属図書館蔵中院文庫『源氏物語』五十二冊(中院・V・二〇)で確認したものである。大きくA『大成』から削除すべきもの、B『大成』を修正あるいは増補すべきもの、Cなお調査を要すべきもの、の三つに分けた。若干の情報を括弧書で略号「三」の前に付した場合があり、また一部に三条西家本以外の伝本校異の訂正も含んでいる。

A 1『大成』から削除すべきもの(補入)

1309―11　もたまへるに―もたまへる〈に〉三

1310―07　ひとくたり―ひと〈くた〉り三

1315―03　人を―人〈を〉三

1315―13　ことさらめきて―〈こと〉さらめきて三

1316―06　えおもひえす―え思〈ひ〉えす三

13 17—08 なれと—な〈れ〉と三
13 19—13 あたりに—あたり〈に〉三
13 20—01 御心—御〈心〉三
13 22—09 御せうそこの—御せうそこ〈の〉三
13 27—07 あしのけ—あし〈の〉け三
13 32—11 いと—〈いと〉三
13 35—14 こと—〈こ〉と三
13 36—09 ことし—事〈し〉三
13 37—08 おほろけにて—お〈ほ〉ろけにて三
13 37—11 ありしに—ありし〈に〉三
13 38—05 給へる—補入三
13 42—09 をきてさためて—おきてさため〈て〉三
13 47—02 なかめて—なかめ〈て〉三
13 47—06 きこえなむ—き〈こ〉えん［きこえん横池肖三トスル］
三
13 49—06 おもてを—おもて〈を〉三
13 54—04 あるましき—〈ある〉ましき三
13 62—05 御かたの—〈御〉方の三
13 63—03 とゝのほり—〈とゝ〉のほり三
13 63—07 こそは—こそ〈は〉三
13 67—13 心—〈心〉三
13 69—05 けちかう—〈け〉ちかう三
13 72—10 人の—人〈の〉三
13 75—08 あまたに—あまた〈に〉三

A 2『大成』から削除すべきもの（ミセケチ）

13 10—07 御返—御返事三
13 14—05 まかてん—まかんてん三
13 15—13 宮—宮は三
13 31—08 六条の—六條院の三
13 67—09 こそ—こそは三

A 3『大成』から削除すべきもの（衍字）

13 13—06 御ためにも—御ためめにも三
13 16—08 なきぬはかり—なきにぬはかり三
13 17—05 ものから—もののから三
13 28—02 まいて—まいりて三
13 28—10 かならすしも—かならすすしも三
13 53—10 あらはなるものに—あらはなるもものに三
13 54—10 心と—こゝろとは三
13 58—12 ゆゝしけなれと—ゆゝしけなれとも三
13 68—01 ことはりを—ことはかりを三

A 4『大成』から削除すべきもの（誤写）

13 10—04 なとせさせ—なとをさせ三
13 12—09 事よ—ことは三
13 20—01 おもほされん—おほされん三
13 24—11 ものし給うし—ものしたまう三
13 24—11 こ大宮—こ大君三
13 25—05 さやうにて—きやうにて三
13 25—10 けしき—ふしき三
13 27—11 もし—も三

13 28—01 いける—ひける三
13 28—09 みたてまつらさりける—みたてまらさりける三
13 34—11 その文よ—そのふみは三
13 35—01 おはする—おはす三
13 35—02 ひきあけ給へれは—ひきあけ給つれは三
13 42—01 なり侍ぬへき—なり侍へき三
13 46—08 ものかなしさ—かなしさ三
13 47—07 おもひそふるに—おもひさふるに三
13 48—06 ありへしと—あるへしと三
13 65—13 給へる—たまへり三
13 66—01 さも—も三
13 66—14 ものこし—ものうし三
13 74—03 せしかき—をしかき三

B『大成』を修正あるいは増補すべきもの

13 09—09 まほに—まをに三
13 09—11 わつらひ給て—わつらひて三
13 11—08 あなたには—あなたに三
13 17—12 しかのなくねも—しかのねも三
13 17—13 ほとなれと—ほとなれは［横未見］横池肖三
13 19—13 あらす—あらあらす三
13 20—08 思給へらるれ—思給ふらるれ三
13 22—05 きこゆる—きこゆる三
13 22—05 なかにも—中にも池三
13 27—11 ことそへて—ことよせて三
13 29—01 おほとなふら—御となふら池—御とのあふら三
13 29—11 たてまつりつ—たてまつ〈りつ〉る三
13 31—07 みつけ給うて—見つけ給て三
13 31—08 たまうつ—給つ横三
13 33—05 おほとのこもりぬれは—御とのこもりぬれは三
13 42—01 みたりかはしき心ちとものまとひにきこえさせ—みたれかはしきみたり心地とものまきれにきこえ三
13 42—08 あえなしと—あいなしと三
13 44—01 御返をたにも—御返をたに肖—御かへりたに三
13 46—02 すくなう—すくなく三
13 47—01 なはなち給そ—なはち給そ三
13 50—01 し給へるを—し給つるを三
13 54—01 かの—かの〈日は〉三
13 60—14 ゆつるへき—みつるへき横—みゆつるへき池—見ゆつる肖三—見ゆ〈つ〉る肖
13 61—09 けに—〈けに〉三
13 65—11 たきしめ給ひ—たきしめ給三
13 67—05 いひかへし—いひかくし肖—いひかへし三
13 72—07 ころ—心横池三
13 72—08 おほし—おもほし肖三
13 73—13 なかに—中に三

Cなお調査を要すべきもの

13 11—01 五六人はかり—〈五〉六人はかり［中院本ハ補入ニアラズ］三
13 16—10 かさなりぬらむ—かさ〈なり〉ぬらん［中院本ハ補入ニアラズ］三

1318—07　めさましうけに—けにめさまし〈う〉［中院本ハ補入ニアラズ］三

1319—12　それたに—それ〈た〉に［中院本ハ補入ニアラズ］三

1319—13　きゝおもひ給はむ—きゝ〈思〉給はん［中院本ハ補入ニアラズ］三

1326—12　いと〳〵おしけなる—いと〳〵〈を〉しけなり［中院本ハ補入ニアラズ］三

1329—07　おもほすも—おもほすも［中院本ハお〈も〉ほすも］三

1331—14　御心ならひ—御〈心〉ならひ［中院本ハ補入ニアラズ］三

1332—08　おれまとひたれは—をれまとひたれは（と）［中院本ハをれまとひたれと］三

1335—11　たまさかに—たまさか［中院本ハたまさかに］三

1342—13　なけききこゆ—なけきゝきこゆ［中院本ハなけきゝこゆ］三

1344—11　おもひとゝめたりし—〈おもひ〉とゝめたりし［中院本ハ補入ニアラズ］三

1351—09　おもひ給はむ—思給ん［はアルカ、中院本ハ思給はん］三

1357—12　そへたるか—そへたる［中院本ハそへたるか］三

1360—04　よろつに—よろ〈つ〉に［中院本ハ補入ニアラズ］三

1374—14　われを—我〈を〉［中院本ハ補入ニアラズ］三

（かとう・ようすけ　本学大学院准教授）